

住民と関係人口が共に楽しめるかわまちづくりに対する提案：大阪中之島における川辺空間を対象として

著者	銭 邵賛
雑誌名	KGPS review : Kwansei Gakuin policy studies review
号	28
ページ	61-70
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029521

住民と関係人口が共に楽しめるかわまちづくりに対する提案

－大阪中之島における川辺空間を対象として－

銭 邵賛*

【要旨】

日本も中国と同じく、都市の近代化とともに、河川水質の悪化とその埋め立てが問題である。近年、大阪では、かつての“水の都”としての風景を取り戻し、大阪の水辺をにぎやかな場へと再生するための様々な試みがなされている。このような背景から本論文では、まず日本の河川整備の変遷と現在の利用実態を明らかにした上で、大阪中之島における川辺空間を対象とした設計提案を行う。研究方法として、文献調査および現地調査を通して中之島の利用実態を明らかにする。この調査を通して各区域の特徴とその場所を利用する人の行動特性からそこに住む住民とそこを利用する人が共に楽しめる川辺空間を提案する。本研究の川辺空間提案によって、現代社会における河川の日常的な利用方法と非日常的な利用方法とその河川の記憶をもう一度生活に取り戻すことを目的とする。

キーワード：大阪中之島、かわまちづくり、川辺空間、河川整備、再生デザイン、住民、関係人口

1. はじめに

上水道が普及する前まで、川は人々の生活と深い関わりがあった。しかし、産業化によって、河川が汚染され、人々の生活とは離れることになった。中国浙江省湖州市の町を例として見てみると、菱湖町は工業化のため、川が汚染され、全部埋め立てられたが、周囲の町は工業が発展しなかったため、川が守られ、現在は観光地になっている。特に2015年に特色のある町という政策が提出された際、数多くの町が商業目的により、シンプルでレトロな沿川建物を建造したため、ローカルの文化は破壊され、商業化を満たす均質化した風景しか見られなくなり、川は日常生活と離れた。

一方、日本も中国と同じく、都市化とともに、水質の極度の悪化と川の埋め立てが問題であった。そこで、洪水や水害などの災害が発生し、川の問題が注目、検討されるようになった。とくに、日本では、コンクリートを用いた河川工法の導入と治水主体、単一目的での川の整備を皮切りに、河川改修が展開されている（吉川、2007）。しかし環境に対して河川の形が不自然であるという問題が生じ、1990年代からは多自然型川づくりが現れている。最近で

* 関西学院大学大学院総合政策研究科博士課程前期課程（dye01264@kwansei.ac.jp）

は、「親水公園」という形も流行している。特に近年では、川の環境的、文化的価値が見直されている。河川法の改正に基づいて、2009年に市町村や河川管理者、民間事業者と地域住民の連携の下で、「河川空間」と「まち空間」が融合した良好な空間形成を目指す「かわまちづくり」も実施されている。

しかし、整備の仕組みに関する記録は多いが、実際の河川利用効果を評価する研究は十分になされてはいない。特に、観光化したかわまちづくりについて、関係人口の川を楽しむ方法と住民の川に対する利用状況とが共生可能か否か、両者間における矛盾点の有無、そして矛盾点があった場合の解決策については、まだ明らかにされていない。

これらを検討するためには、川辺に一定数の住民と関係人口が必要である。そこで、観光業を開発した都市の川辺を研究対象地として選定した。特に大阪はかつて（明治頃）、「水の都」と呼ばれていた。しかし、20世紀に入ると、工業化のため、大阪はコンクリートと公害の「高度成長」都市になり、川も破壊されていった。近年、大阪では、かつての遠い記憶となりつつあった“水の都”としての風景を取り戻し、大阪の水辺をにぎやかな場へと再生するための様々な試みがなされている。

本研究では、大阪中之島を研究対象として、文献調査と現地調査により、住民と関係人口の河川空間の利用状況を把握し、実際の空間と人々それぞれの需要を分析し、住民と関係人口が共に楽しめる川辺空間を提案する。川辺空間の提案によって、現代社会における河川の日常的な利用方法と非日常的な特別利用方法を提出し、そして河川の記憶をもう一度生活に取り戻すことを目的とする。

2. 日本における河川の整備方法

本節では、各時期の背景や当時の法律と政策の角度から日本における河川の再生状況について整理する。日本の河川法の制定と改正に伴い、主に治水、利水、環境という3つのテーマがあったが、社会経済の変化と人々の河川への関心の高まりによって、河川の整備は治水、水質改善、オープンスペースの確保、親水性の向上、まちづくりとの一体化、生態系の重視、川を活かした環境教育の推進、河川への市民参加、多様な主体との連携という合計9段階に分けることができる（表1）。

河川の利用状況を分析するため、『河川敷地占用許可準則』で提出した八方法の中に、住民と観光客と関係ある河川の利用方法を抽出し、実際の事例と結び結果をまとめる（図1）。

表 1 日本における河川整備の変遷

テーマ	年次	法令	事業名
治水	1896	河川法	
水質改善	1956		公害問題に重視
	1958		水質調査の実施
オープンスペースの確保	1964	新河川法	
	1965	河川敷地占用許可準則	
	1967	公害対策基本法	
	1970	水質汚濁防止法	
	1971		
	1972	自然環境保全法	
親水性の向上	1975	河川環境管理基本計画の策定開始	ダム周辺環境整備事業
	1980	河川環境管理基本計画の策定	
まちづくりとの一体化	1983	河川敷地占用許可準則改正	
生態系の重視	1987		ふるさとと川モデル事業
	1990	多自然型川づくりの推進	マイタウン・マイリバー整備事業 河川水辺の国勢調査
	1993	環境基本法	よみがえる水辺づくりモデル事業
	1994	河川敷地占用許可準則改正	
川を活かした環境教育の推進	1996		水辺の楽校プロジェクト 水と緑のネットワーク整備事業
	1997	河川法改正	
	2003	自然再生推進法	
	2004	環境教育法	
河川への市民参加	2006		多自然川づくり基本方針
	2009		かわまちづくり
多様な主体との連携	2011	河川敷地占用許可準則改正	
	2015		ミズベリング・プロジェクト



図 1. 日本における川辺空間の利用分析

——『河川敷地占用許可準則』で提出した八つの方法の中に住民と観光客に関わり河川の利用方法の分析

3. 大阪中之島について

本章では、大阪中之島を研究対象地として、中之島に対する既往研究及び資料収集を行い、中之島の歴史文化背景、変遷および再生状況を把握する。また、中之島に関する4つの構想内容を考慮しながら、未来の利用者の需要に対応できる案を提出したい。

4. 敷地調査

本章では、文献調査及び現地調査を通じて河川軸の各要素の特性を捉え、水域と陸域の関係性や川辺建築との係わり方を確認した。また、観察調査として、中之島河川軸の各地域で住民と関係人口による川辺の活動をそれぞれ調査し、そして11月3日の第三回中之島リバーフェスタを代表として取り上げ、中之島における非日常的なイベント状況の調査をした。最後に、中之島周辺の住民、サラリーマンやイベント参加者と観光客に対するインタビュー調査及びその回答を通じて、それぞれの川に対する印象を把握し、中之島に対する評価と期待を収集した(図2)。

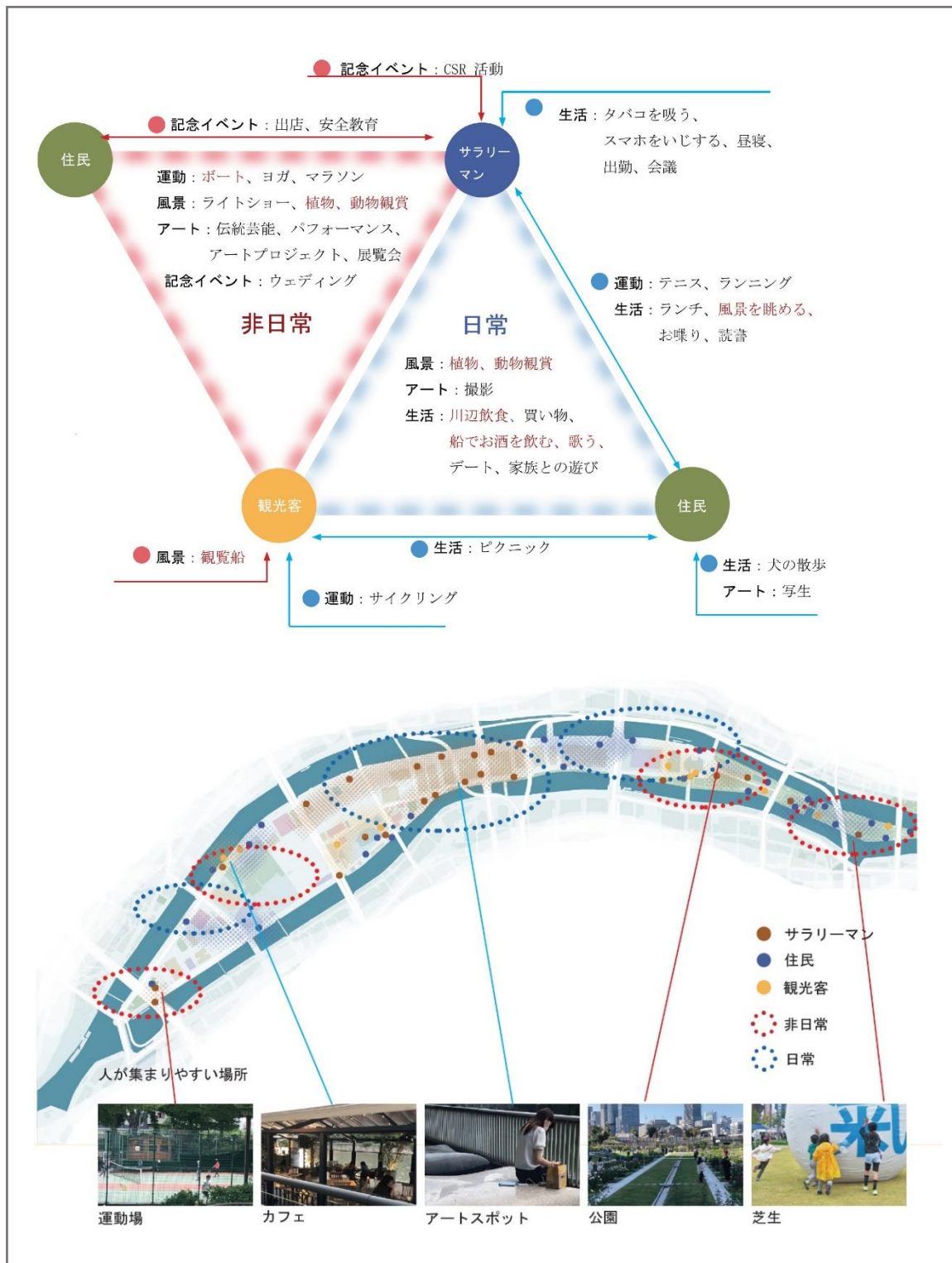


図2. 中之島における人の日常と非日常活動の分析

5. 敷地分析

日本では、2016の年河川敷地占用許可準則の特例占用の改正により、河川区域内で設置できる施設は10種類ある。中之島の川辺空間をよりオープンにできるよう、代表的な事例と実際の準則を参考にしつつ、開放感ある川辺空間を提案したい。

行政区画、構想計画、そして現地調査の結果を参考にし、7つの区域を分けて、それぞれの特徴を分析した。

6. 中之島に対する提案

大阪の魅力を示し、そして大阪中之島における住民と関係人口が共に川辺空間を楽しむことを目的として、今回提案したいのは、「中之島は大阪のシンフォニーである」という構想である（図3）。その理由には3つある。一つ目は中之島の個性、市民の中央広場として、各要素がシンフォニーのように特定のルールにより美しく編成されている点である。二つ目は、中之島の形、堂島川と土佐堀川が五線譜のようで、小節線としての橋が中之島を小節に分け、特定のメロディーを合奏している点である。三つ目は、同じ「水の回廊」の一部分としての道頓堀川の整備テーマが「なにわの水辺劇場の創出」であり、それと照応させれば、「水の回廊」は全体的に「アートの回廊」というテーマがつけられ、水都大阪の魅力をさらに向上させることができるという点である。

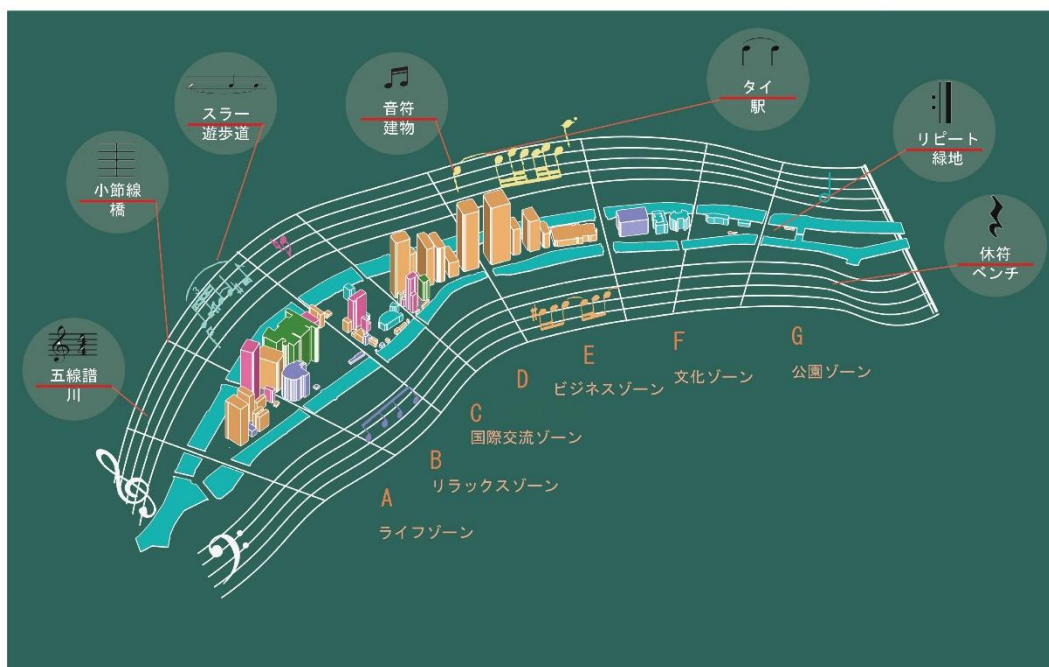


図3. 中之島に対する提案

具体的な設計方法について、次元の角度から、テーマ整合、要素の分解、時間の貫通という設計方法を参考し、川辺空間をデザインする。中之島全体と各区域の現状と課題を踏まえ、具体的な設計案は図4、図5のとおりである。

(1)中之島全域

中之島の体験連続性を向上させるため、縦の五線譜に見立て、遊歩道、自転車道と舟運の航路を整備する。

(2)Aゾーン（ライフゾーン）

親水性ある観覧席を設置し、それ以外に、スケートボード場としても利用でき、若者や運動を望む者を集めることができる。観覧席の下には関連施設、浴室や更衣室も設置し、便利な運動場所をデザインする。

(3)Bゾーン（リラックスゾーン）

船着場、商店街や飲食ゾーンなどの機能を集中させ、人々が川を楽しめる空間を提供する。

(4)Cゾーン（国際交流ゾーン）

既存のビジネスビル間の散歩道を延長し、川辺に交流拠点をデザインする。

(5)DEゾーン（ビジネスゾーン）

高架下の空間を利用し、商店街を創り、信号がないリラックス空間を設計し、昼休み時間を有効に利用することができるようにする。

(6)Fゾーン（文化ゾーン）

水エリアの上に観覧席を設置し、川を舞台として、向かい側の北浜テラスとの対話もできるようにする。

(7)Gゾーン（公園ゾーンの西側）

その水域は中之島周辺で最も安全で、静謐な水域であり、再び船着場と親水プラットフォームを設置し、歩行者、自転車利用者と船利用者の接点として、共に川を満喫することができるにする。

(8)Gゾーン（公園ゾーンの東側）

既存の螺旋段階を延長し、船のような構造物をデザインする。上のプラットフォームでは、風景を見ながら、ピクニックすることができる。下の空間は私的で静かな空間として、安心して昼寝をすることもできる。

7. 終わりに

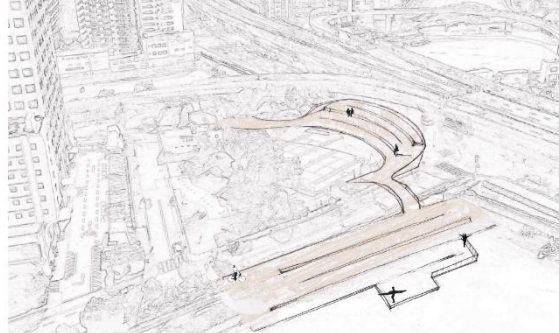
本論文では、まず、日本の河川整備の変遷と現状を整理した。次に、大阪中之島を研究対象地として、中之島の歴史、再生と今後の構想について確認した。そして、現地調査で中之島の利用状況と課題を調査し、それぞれの特徴と需要を合わせて、最後に「中之島は大阪のシンフォニー」という提案を提出した。この提案により、中之島における住民と関係人口がより自然を満喫でき、川の魅力も都市のシンフォニーのように人々の心を響くことだろう。

大阪中之島に関する経験と課題を他の事例に応用し、中国における活用の可能性に対する検討が今後に残された課題である。

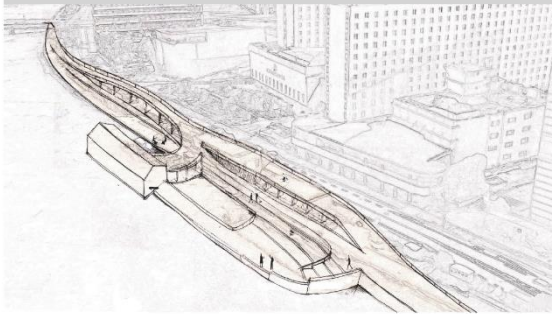
① 中之島全体を縦の五線譜に見立て、遊歩道、自転車道と舟運の航路を整備する。



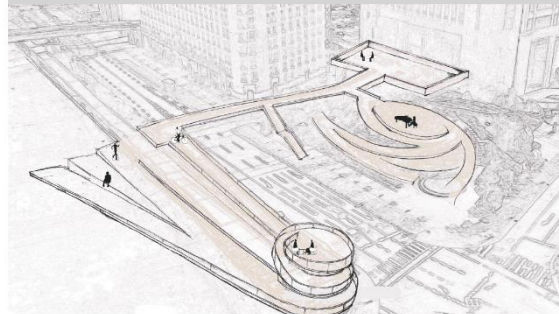
② 浴室や更衣室を設置し、若者と一緒に川辺で運動する。



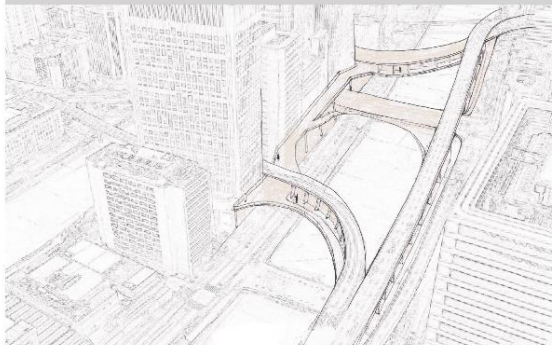
③ 船着場や飲食ゾーンなど総合的な川を楽しむ空間を提供する。



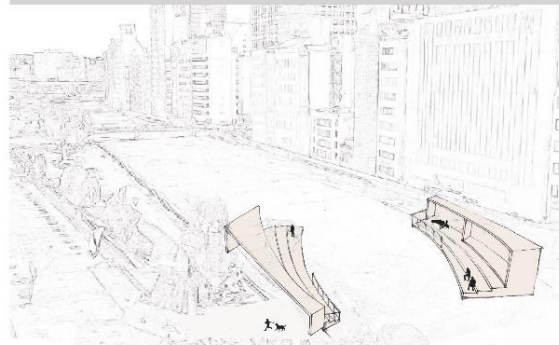
④ 既存のビジネスビル間の散歩道を延長し、川辺に交流拠点を設置する。



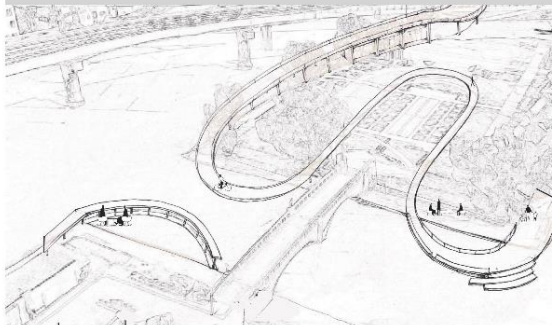
⑤ 高架の下、サラリーマンがゆっくり食事をする事ができる。



⑥ 川を舞台として、向かい側の北浜テラスと対話できる。



⑦ 再び船着場と親水プラットフォームを設置し、川を満喫することができる。



⑧ 私的で静かな空間として、川を眺めながら安心して昼寝をする。

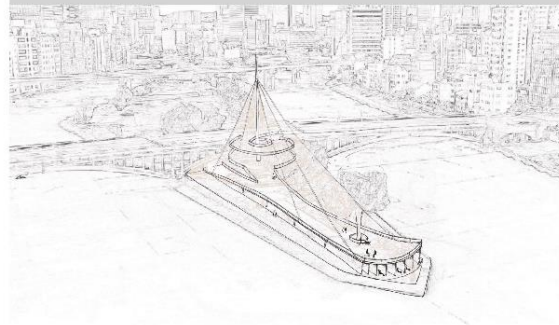
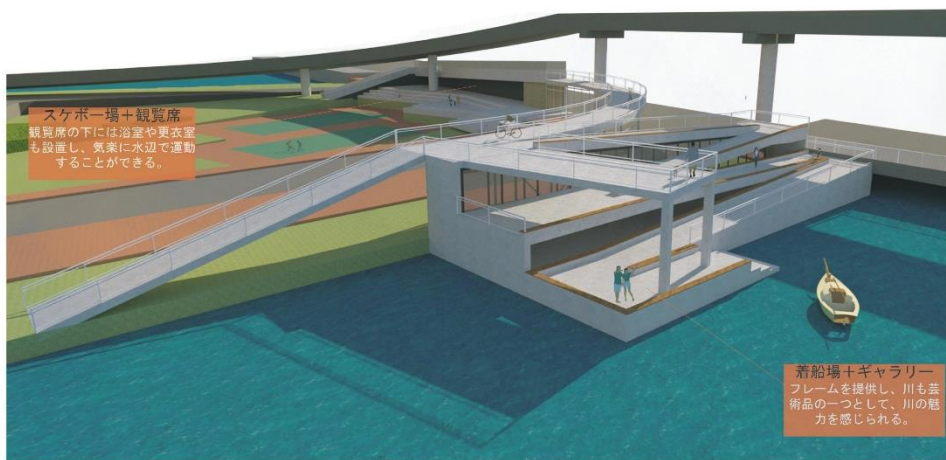


図 4. 中之島各区域に対する提案

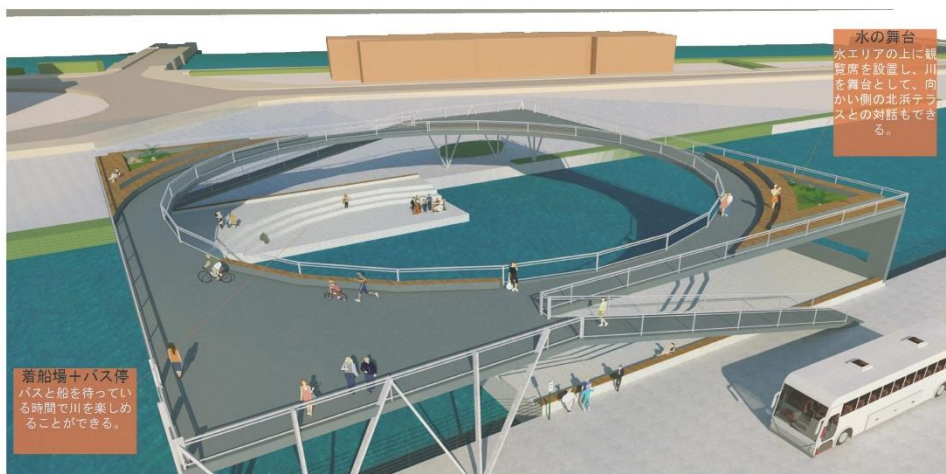
② ライフゾーン

親水性ある観覧席を設置し、それ以外に、スケートボード場としても利用でき、若者や運動を望む者を集めることができる。観覧席の下には相関施設、浴室や更衣室も設置し、気楽に水辺で運動することができる。



⑥ 文化ゾーン

水エリアの上に観覧席を設置し、川を舞台として、向かい側の北浜テラスとの対話もできるようにする。そして内側は着船場を設置し、外側はバス停を設置し、バスと船を待つ時間で川を楽しむことができる。



⑦ 公園ゾーン

その水域は中之島周辺で最も安全で、静謐な水域であり、再び船着場と親水プラットフォームを設置し、歩行者、自転車利用者と船利用者の接点として、共に川を満喫することができる。

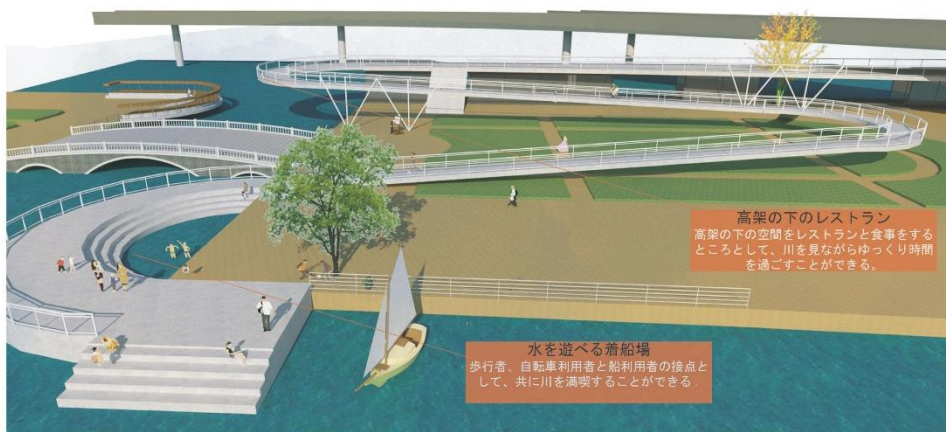


図 5. 中之島各区域に対するイメージ図

8. 謝辞

本論文は、筆者が関西学院大学大学院総合政策研究科入学以来、建築・都市デザインに関する研究としてとりまとめたもので、本研究に取り組んで以来、浅学非才な筆者がまがりなりにも研究を遂行できたのは、関西学院大学大学院八木康夫教授の何物にもかえがたい、長年にわたる一貫してのあたたかいご指導とご鞭撻の賜物であり、ここに謹んで深く感謝の意を表します。

2021年3月

銭邵賛

【参考文献】

- 「いい川・いい川づくり」研究会（2004）『私たちの「いい川・いい川づくり」最前線』学芸出版社
- 石井伸和（2018）『小樽志民 運河保存運動の市民力』社会評論社
- 泉英明、嘉名光市、武田重昭、橋爪紳也（2015）『都市を変える水辺アクション:実践ガイド』学芸出版社
- 圓道寺ゆみ、宮脇勝（2014）「規制緩和に伴う河川沿いの占用と利用に関する研究～水都大阪官民一体事業の特徴と利用状況に着目して～」都市計画論文集/49巻(2014)1号/p.33-40
- 川崎雅史（1991）「都市景観の固有性に関する研究(1):河川を軸としたシーケンシャル景観のイメージ分析」日本建築学会計画系論文報告集/422巻(1991)/p.69-76
- 隈研吾（2020）『点・線・面』岩波書店
- 神戸市建築デザイン研究会（1987）『公共建築デザインマニュアルー公共建築は街並みのコンダクターー』神戸市住宅局
- 菅原遼、畔柳昭雄（2016）「水辺の社会実験から見た河川区域の空間利用と地域連携に関する研究～空間構成と事業スキームに着目して～」日本建築学会計画系論文集/81巻(2016)722号 p. 971-981
- 園田聡（2019）『プレイスメイキング:アクティビティ・ファーストの都市デザイン』学芸出版社
- 高岡伸一、嘉名光市、倉方俊輔、佐久間康富（2016）「大阪市「生きた建築ミュージアム事業」の取り組みについて」日本建築学会技術報告集/22巻(2016)51号/p.749-754
- 高原一貴、嘉名光市、佐久間康富（2012）「大阪・中之島における都市夜間景観の特徴に関する研究ー来訪者の認識と照度比との関係に着目してー」日本建築学会計画系論文集/77巻(2012)672号/p.403-408
- 武田重昭、坂本幹生、加我宏之（2017）「大阪市都心部の河川における親水性の評価とその整備手法の変遷に関する研究」ランドスケープ研究/80巻(2017)5号/p. 663-668
- 鳥越皓之（2012）『水と日本人』岩波書店
- 中野恒明（2018）『水辺の賑わいをとりもどす 世界のウォーターフロントに見る水辺空間』花伝社
- 中之島をまもる会（1974）『中之島ーよみがえれわが都市』ナンバー出版
- 畠田恵、嘉名光市、佐久間康富、阿久井康平（2017）「都市部河川の船上景における景観構成要素への注視行動特性に関する研究～水都大阪・堂島川を対象として～」日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集/15巻(2017)/p.61-64